

浪花
街
通
尊

76
1293
2



夜半者寄寂子

明 7邊 6
1293

76

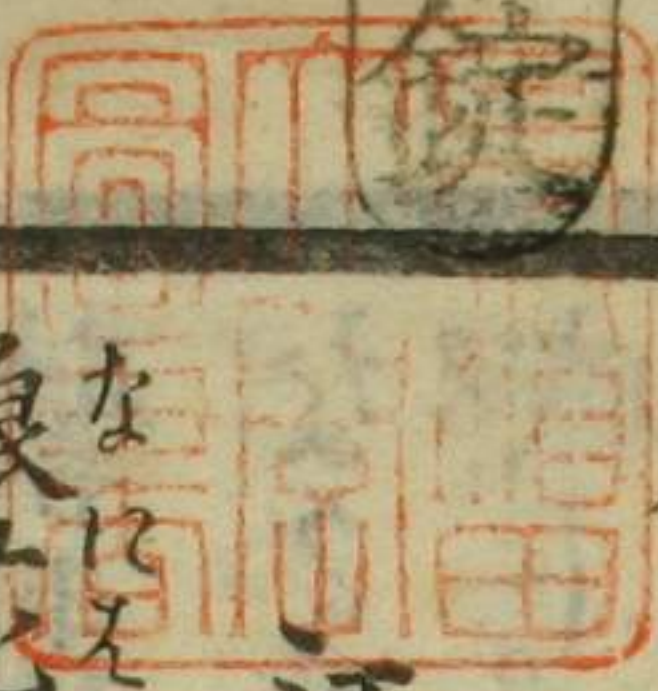
街能囀卷之三

江戸前乃隠士 平亭銀鷄撰



浪花なる頃慶町の夜見世のにぎそい高麗上層
土いざあうは我日の本の君が代小かる目出さ
夜の景舞花と極めーあうさぬへ餘國小ぬえ
あふぐらば商人の燈火の天小かやき街の提灯
星うとうさぶ茶屋の樓上小酒客あればせんさいの

本館
文庫



江戸前乃隠士

見世小餅喰ひあり。願加ふりの侍鮓とつゆめ。
 前垂の町人揚物とやらす。魚屋買人ととらへて。鮓
 ちり小賣つくとすれば八百屋の丁稚葱れども負す
 行われへ歸るありとあれば行ありて。其賑やうなると
 譬ふ物なほ。されば万松千長の二安も鶴人小そく
 なりされ。初めて夜見世のありとぬと孰火賢見て大
 感ト。三人うちつれ家小ううられ。女房 オヤ、お早う
 御早う。私い敷へでもおいでうと。思ふておほしと

鶴人 扱れも敷で二盃上やうとおもつて出かけさか
 先生がさか何分モウ 飲ぬうら。ゆりて来ると有
 てさうら。今夜の飯り中。明日の銀雞さんを
 さういつてきりて昼過う敷といふまゝれ小志や正。
 こなとも朝のうら髪と結せき置て。比白さぬの
 内供とすうぐい。女房 夫やアうれおほす。久し
 ぶらで出うけさうい。サ文居もちよと見は志よ
 万松 ゲイノウ列ア、大酔でうりヤス。御新造さぬ

御新造三々巻

内茶と一願いふやうや。となく多しがで来るやう

でやうやす。女房 へんく只今茶く一ッ入てあげは

あ。千長 万松さん沖新造さぬ江戸言よお家

さんといろく貫いふぬ。万松 早いつく恐れ入申。

鶴人 コサ成田屋の処うくれと友白髪と入さじ

女房 わらひアリやア 鶴の屋さんへお上なさつとチヤ

おませんり。鶴人 かん小さうごっけな。おかきふ多し

申。すんたう白折の鷹の爪といれさじソニテ

子に其花月堂の丁子風呂ぐらひ。煉羊羔犬も

いざりや申とせ。万松 イヤお菓子ハ何もいりや

い。お茶と頂きなう。浦とお新と。てけや正然

心生昼もお責つけやとて。ちとおよるるも忘れ

ん。鶴人 多くはなうハ終日終夜でも退屈

の流儀でやうや。千長 叔先生順慶丁ハたが

し賑なことでやうや。丸小江戸の浅草市といふ

ものでやうやすぬ。大壮な人でやうやすか。毎晩の

通りでわたりやすね。鶴人さやうと。毎晩の通り
 ぐらやス。順慶町をぐらやア右やせん。心齋橋
 筋の清水町のへんも。毎晩の通りでわたりやス。毎
 度の夜も九ツ頃迄郡集とさうでわたりやスガ。今で
 ハ五ツかぎり小引で仕舞やス。万松何といふとな
 小夜見世へ持出して賣のてわたりやス子イ。鶴人さや
 う喰ひ物も出れば袋物大小類古道具迄も出
 やス。万松江戸でも近年浅草御附。両國橋

の間や堺町辺。人形町のわたり小。ちうから
 見世が見えやス。ゆれも大坂の夜見世と
 つでわたりや正。万松さやうく。何の迄小餘程
 何う歯いも能くあるといふことてわたりやス。鶴人さや
 新丁橋の上小。長命丸を賣て居中。こがおき
 つきやうと。わたりて按摩の上見世が直小涼室
 でわたりやす。千長なるかどく。長命丸と見かけ
 中。ちうも字と白くぬい。行燈でわたりや

外わ小こも大おほ分ぶん橋はしの上うへ小こ商あき人ひとが見みえ申まをす。鶴つる入い夏なつ。
 橋はしの上うへ小こ大おほ壯さう見み世よと出で。ヤス。それそれも天てん科か商あきひで
 なく。居ゐ酒しゆ見み世よたたととががわわりりややすす。橋はしの中なかががせせま
 くななつて困こまりりヤス。五ご松そう橋はしの上うへの商あき人ひと江え戸ど小こへへととん
 と無なくくととててわわりりややすすね。千せん長ちやう江え戸どで橋はしの上うへ小こ居ゐ
 商あき人ひとへははたたるる龜かめははななりり鰻うなぎとと賣う買かひののとと淺あ草くさ海うみ苔こけ
 ととろろののとと金かねのの耳みみ搔かがが一い本ほん四よ文ぶんとといいふふややつつと。紙かみ代しろ
 板い行ぎやう代しろがが唯ただのの四よ文ぶんとといいふふ大おほ小こ柱しら厩うまとと賣う買かひのの小こ限かぎる

位くらでで々々りりヤヤ正せい。五ご松そう暮くれるる。正せい月げつへへははいていて串くわ柄がらとと紙かみと
 包つんで水みづ引ひととううけけ上うへへののとと書かいていて賣う買かひ奴やつがが折おりり橋はしの
 上うへへ出でて居ゐややすす。千せん長ちやうななるるわわどど串くわ柄がらとと見みりりけける
 ととががわわりりややすす。中なかへへ大おほ坂さかののやや小こ屋や基もと見み世よとと出で。
 腰こし掛か基もととと置お置おししととるる。けけいいののあありりややせせん。
 橋はしの上うへでで六むつつとといいふふ日に本ほん橋はしでで々々りりヤヤ正せい朝あさ市いち
 ななららずず小こ八はち百ひゃく屋やささううなな屋やのの類たぐひいいがが北きた荷にととわわりりヤヤス
 とと直ち小こ棒ぼうつつききがが出でて追おひひ拂はらつつて中なかへへ一い寸すんも置お置おせせヤ

人 **鶴人** さやうく朝通あさとよッて見やすと棒ぼうつさぐ居

りやす。ゆれと処ところの者ものの鬼おにといひやすせん。 **万松** 時ときよ

先生せんせい中ちゆうごゑひぐ醒さめやせん水みづと一いっ盃はい頂ちゆう戴たいいぐや正

いひわがうとんぶり **鶴人** やれさうまやまはし。今いま上あますよ。

二に弁べん先生せんせい小水こみづと上あさつせん。 **女房** はんく只ただ今いま直ちま上

はすさう。多おほゆちうへお出いなさうはし。 **万松** イへ

かうはいらさうりますな。私わたくしの大醉おほい後ごの水みづ瓶びんと首くび引ひ

おひりやすうら。おふん 十じゅう分ぶん小せうつとまします。サうくあなさうら

らへいらさやうはし。 **女房** なつゑいし衣類いれいへ水みづがかり

はすモチ。 **千長** 万松まんしょうさんぶしこのご。又また例れいの水みづうといひ

これも捨 **鶴人** コレ皆みなさぬごふいふめのごすくこちへ。

千長 いや先生せんせい此間こゝも脇わきで見みやし。が。モト大坂おほさかの空そら電でん

ハ誠まこと小こきねいせうやス子こ。此内こゝのものもとんごいひ恰好かつかく

ご江戸えどと大おほちがひでありヤス。 **鶴人** さやうさ空そら電でんハ大

坂さかの方が焼やいひやうせうやス。鍋か釜くと掛かる穴あなぐけお

丸まるく。うらぬ。といふめでうやスうら。火く氣きも肉にくへ十

奇世傳三巻

分ぶん小こ龍りゆうり新たにまも大お氣か小こ儉けん約やく小こなり其そ上じやう又また早はやく
 煮ひとちやすソこニこテこ是これ沖お見みトとヤや竈い小こ灰はいといふ
 ぬぬののゆゆももたたくく一い度どくく小こ取とヤやスす下したハは此こ通と瓦わででウう
 ヤやスす其その上うへ小こ竈いのの口くち蓋あふととぬぬててやすすりりウうカか一い火ひのの用よう
 心こゝろもも善よウうヤやスすトといいたたるる見みせせるる也や千ち長ぢやうかかりり印いんどど是こゝい
 奇き妙めうどど方かた松まつさんさん一い寸すん止と見みトとヤや方かた松まつ水みづとと四よ五ごととい
 これこれのの思おもひひののききどどモもシし先せん生せい大だい坂さかのの竈い小こハは新たにま懸けと
 いいふいふいののぐぐららふふヤやアあウうウうややせせんんウう大だい坂さかのの風かぜどどののつつて

江戸えどでもでも近ちか頃ころ鐵てつでで拵しらへへののとと瓦わでで焼やくくののとと二に通と
 とと賣うヤやスす千ち長ぢやうささややくく上う野ののの山やま下した小こ一い軒けんウうヤやスす
 セせイいソそ草くさ履づき拵しらへへてて居いるるウうちちでで鶴つる人ひとささううののウうちちでで
 ウうヤやスす江え戸どでで新たにま懸けとと賣うとといいふふとと聞き中ちゆうとといいふ
 然しかしし大だい坂さかのの竈い小こハはののここららばば有ありりとといいふふ訣けつががヤやア
 ウうヤやセせんん有ありり家かもも有ありり無ないい家かもも有ありり私わがののウうち
 杯たいででハは新たにま懸けへへ用もちひひややせせんんななれれととももななれれのの用もちウうち
 方かたがが利り方かたででウうヤやスす格く別べつ新たにまとと燃も焼やウうヤやスす

御膳所御膳三巻

六

モシ其処そこの火消ひけし壺つがと神かみ覧らんトヤ。江戸江戸のりい

餘程よほど雅みやびでりや正。方松かたまつとて見みたるかどこれ

へ雅みやびでりやス。坐ま右みぎの置おて書て翰わんとあ込あなご小こい

ぶかものハヤせん。鶴つると外まへの四角しかくなもりやスゼイ。

千長せんちやうモ此魚板このいさなも江戸江戸のりい足あしがらひやすぜい。

江戸江戸でかうりい足あしをつらもの料理場りやうりやばの大おほ姐あねは

かぎりやす。鶴つるたるかどさやしく。モシ其火か

口くち相あも神かみ覧らんトヤ。江戸江戸より四角しかくでりや正。

きりて鎌かまもらりい石いしも用色もちいろでりやス。方松かたまつたる

かど大同たいどう小異せういでりやすねい。然しかし江戸江戸でも近ちか

頃ころへ此角色このかくしきの石いしが流行りやうこうひりやすよ。文政ぶんせいの中

頃ころ迄まで専せんりやしく。真白まはくな火ひお石いしより此方このあたが

火ひが出でるといふとでりやス。鶴つるたるかどさやしくか

も知しやせん。火口かぐちも大坂おおさかで旅たび火口かぐちでりやス。江戸

のやうな麻あし殻かやもろこし殻かへ用もちひやせん。千長せんちやう

へ引ひきれい鎌かまも微ちひさくて間小まこ合あやス。ごありで

火口箱かぐらばこも小ぶりこぶりで夕ゆふやス。フモシくろ黒い徳利とくりと何

焼やきで夕ゆふやス。**鶴人**乙おつが大坂おさかの合あひ負ひ多た徳利とくりで夕ゆふやス。

江戸の通言の酒屋より日々酒を入れてよこす 江戸えどの夕ゆふの餘よ

徳利を合負多徳利といひやせり。 夕ゆふの餘よ **万松**徳利とくりを多た はとらあけ。たたららかかどどコレハ

雅みやびど。モシもしちちよよいと。花はなと生いけるるななどど小こもも志しややれれて居ゐる

ヤスヤス **鶴人**コレこれが大坂おさかの合あひ負ひ多たつつけけで夕ゆふやス。かかんんなくくづ

よりよりの遙とほようよう夕ゆふやス。松まつの木きの根ねどどささううで夕ゆふやス。かかんんなくくづ

これこれとヒひデデといいひひヤス。**千長**コレこれハ強ひとい暗やにで夕ゆふやス。

是これでハ直ちか小こ火かががううつつううや正ただモシもしヒひデデといいひひとといいふふ訣くで

つつううヤヤスス子こイ。**鶴人**鮮あまらぬぬととせせつつううやススがが火かが直ちか

小こ付づて燃もるる木きの火か出でるとといいふふとと小こ火か出でるとといいふふ

くも知しやせん。**千長**たたららややどどお説せつの通とほりりで夕ゆふや正ただ

女房サアさあ比ひ咄づつととぬぬここちちりり人ひとお出でななささりりははせせぬぬんんな

ららななここも何なにででおはおすすききととなないい知し小こ **鶴人**ややんん小

おはおなないいしし小こううううれれて。其その室むろ知しへへおおちちつつききややここままく

此地このちへへ。**万松**おおききへへアア水みづでで少すこしし酔よめががああやや

と鶴人イヤ水が汲置で悪々や正モシ大坂も善処

どが水ぬい少し困りヤス皆な買水で夕ヤス 万松

へ引堀井戸の夕ヤせんね 鶴人右ての夕や

すが泥ぐさて飲水ぬ悪々夕ヤスうら。皆お

川水と買て飲ヤス 千長江戸の両國辺といふ物で

夕やヤス子 鶴人 大氣小とゆうで夕ヤス 女房 縁と

縁臺 茶くぐ出来はと 万松 へく 六悼り

モシお土瓶と是へらとさうは 鶴人 土瓶と菓

子簞笥と是へ出ささせ 女房 へく 万松 イヤ其臺

所のおはなして思ひ出やとが 世間途中て

見つけ申とが 小新と大壮貫目小掛て是申とが

何れいどふするので夕ヤス子 鶴人 大坂での江戸と

ちがつて小新と目小掛と賣ヤス 二十貫目と一掛と

志申と。上小新と五百文より五百五十位 雑木で四

百より四百五十文位で夕ヤス 千長 へ引とれで江

戸の中り小壹分小袋束といふ訣で夕ヤス

炭も目で賣やす。鶴人いづく炭へ江戸の通ぐと

ヤス物すべ惣おんて止新炭味あま噌そう醬油しょうゆ塩しほの類るいの平均へいきん見けんや

くら直段ちくだんの処ところへ同トおなやうな物もので々たや正酒せいしゆへ江戸

よりよりの微安みやすうらうヤスやすとれど此この節せつへ同トおなとてらり

や正せい方松ほうしょう先生大坂の鑄た小せうの皆みななつらら無むといひいや

かさやうでやうやうやすやす久く鶴人つるひとつらつらのやせん大坂おほさかでも

中ちゆううう上の暮く一いつの竈かまどの數かずの五ごの六ろくも右みぎやすやす。

釜かまへ釜かま鑄たへ竈かまどへ掛かきううりて置おてて煮ゆ物ものが

われわれが空あか処ところへうけて煮ゆやすやすと別べつ又また鑄たや釜かまををい

して其その処ところへ掛かるるへ及およびせんせんそれそれももあつるあつるへ無なくも

間ま合あ合あとの小こ処ところよりよりして昔むかしううつるつるなりなりと見けんええや

とはとはなりなりの処ところ時ときの太鼓たいこををううりり市いち中ちゆうををああららくく。方松ほうしょうアア太鼓たいこへ何なにの太鼓たいこででら

ヤス。鶴人つるひとなるなるやど是これへへおおううららががひひ清きよ最さいアアレレ時ときの太

鼓こででららヤスヤス。江戸えどででの夜よるの拍子木ひょうしきををああつつて時ときをを廻まわす

が。大坂おほさかででの夜よるの時ときへ太鼓たいこでで廻まわすす。今いまのの五ごツつででららや正

モもははど江戸えどへ無なくくががややスス暮くれの節せつ分ぶんの晚ばんも

日本書紀

若氣わかしきが寄合よりのあひして生海鼠なまねと糸いとで結むすひて五六人對たいの風かぜ
 俗しやくなどとして鉦かねや太鼓たいことあききながら土龍つちりゆうが宿やど
 小こり生海鼠殿なまねのどののお見舞みまひがやと囃子はしこながら往來わうらい
 と歩きやす誠まことは古風こふうな物ものでうりやす常つね中ちゆうたはるはこ
 とつひやすが此晚このよるふからうてふとらごとの御見舞ごみまひ
 とつひやす。然しかし今いまふたはともなな小只こだけ歩あくや
 すでうりやす。つひふらふやどなれば御方ごかたの内家うちけふか
 う御例ごれいもつるやうふうけあうりやうと久ひさしい跡あとは

上州じやうしゆう七日市にちいち遠とほいこ中ちゆうことき農人のうじんが寄合よりのあひく畑はたけ
 中ちゆうと何なにのいひながらあつて歩あき中ちゆうこと見や
 とが跡あとでまけむやう土龍つちりゆうもらのほぐなうと
 とつひやす。我われして江戸えどふじぶらもらといひ
 やすが大坂おほさかふらうちもらといひやす。牛長うしぢやうもめて承うけたまはり
 やしと。夫それやう奇妙きせうなまてらやス子こ。万松まんすうソ六ろく何なにぞ
 訣くわいのつらとてうりやすうね。鶴人つるじんさやうと別べつのつけは
 かりやせんがさうすと土龍つちりゆうが庭まの土つちとあげぬと

りててけりやス。モシやと江戸小無ことづけりやス。
 正月二日が銭湯の初ゆりて是と初湯と唱やス。元日
 の夜も火と焼初めて明セツ頃小なりやすと湯
 屋の若者四五人位づ對の風俗と〜。又
 其湯屋の木の半てんた〜を着やして提燈と下
 銅盥と〜き。竹と吹ながら市中と沸と沸と〜と大聲
 と上て觸て歩きやすがコヤ〜とん陽氣で勇〜
 もの〜やス。[五松] 今珍愛こと〜やす。なるやと

お説の通り。コヤア陽氣で〜や正。[鶴人] 元日の夜新
 町の禿や子供も。おや方の〜何方中へ遊び〜
 出やすが。夜が明ると皆な引返やす。い〜な丁
 燈など下て中〜殊勝な物で〜やス。[千長] ハテ
 いろ〜替〜ことあるの〜やス。イヤ先生正
 月の重誥小海山と〜が〜やヤ〜やせん。
 どの〜試で〜やすぬ。[鶴人] 海といふ魚類の
 重誥又山と〜の〜精進の重誥と〜で〜

大坂銭湯二而正月二日初湯乎市中圖



拝
勇
々

さ
が
し
梅
汁
末
楨
立

新
三
之
巻

十
日
上

大
坂
の
銭
湯

米人

松の戸の松うら

明や今朝の雲

日のくまのま

つらぬくと雲は月

竹人

梅の花ちのさるま

九関

来りもよ

花頂

初志風や湯屋へ

うらそ梅の花

梅打てゆれ

空をた戸はう那

里居

春枝

居風はも夕度の

うらそ木若は宿

柔あはるの

里の光をうら

枕江

うらそ湯あのも

霞月

俣式うら

馬宿

法標は音も風

それゆ初湯うら

初湯うら

さうそや梅の葉

其樂

ヤスハ助紙小も海の箸山の筋と書分て置道やす。

〔五松〕海山の訣がゆく知やし。是をモモ面白

仕来でりやす。浄出家方が羊頭小来れときも。

さう分ておさやすと。大氣小やんやでりやすぬ。

〔千長〕箸紙と別る小志て置道の二寸志とゆひてい

格であうやすよ。〔五松〕さうとモモ。部分の晩中々

厄拂や大神樂へ来やすね。〔鶴人〕厄拂ハ江戸の通

小来やすが。大神樂へりやすん。〔千長〕イヤモモ先生

急ぐ訣がアアアアせんが秋小たりやすと。私の懇

意な立兆といふ画工が上坂のくやすが。とま

浄近処小鳥渡し。賣居りやすぬ。〔鶴人〕

有や正とも。此先小も一軒心當りがりやす。六

か二間小。ハるが一間。二間の玄關様体が有てそれ

小勝手でりやす。〔千長〕ソリヤ奇妙下度おつて付て

りやす。何程のものでりやす。〔鶴人〕賣家小の世

やすぬ。ソリヤそれ貸のでりやすが。合小三分

位なまごて有りや正。千長か合あふいふいふい訣けでうり

ヤス。鶴人つるかるやど是これの清きよ存ぞんありやまめ。江戸と違ちがう

て大坂での店賃みせぢやんの限かぎらぬ物ものの勘定かんだいが二月目の

拂はらいでりやス。江戸で月つきくの勘定かんだいでありやすが大坂

の六十日の貸借かいくでありやすゆゑ合あふいふいふい三さん分ぶんといひ

やすの二月ふたつきのてでりやス。一いつヶ月げつのそ分ぶん二に朱しゆの

付つやす。三長さんぢやうそれの安やすの物ものでりやス。どあぞ扱あれが

塞ふさがらあらい居ゐるよううりやすが。鶴人つる其その外ほかもほど

何程いちぢもうりや正。万松まんぢゆう大坂でも引越ひきこのときは近き近き

蕎麥そばと配くりやス。ね。鶴人つるよく江戸の蕎麥そばとく

かりやすが。大坂での附木つけぎと二把にが賦くりやス。大坂の

附木つけぎの七八分位ぶちばんぶんの中なか小皆こみなな切きて束たばてりやス。それ

と二把にくる人ひとも有り。二把にくる者ものも有りやス。万松まんぢゆう

テ妙めうなてでりやス。子こ。附木つけぎといふいふい訣けでり

や正。鶴人つる附木つけぎと配くる訣けの銀鷄ぎんけいさんの考かんがへが面おも

白しろふりやス。引越ひきこいづれ家いへと持も目出めいといふいふいこととで

御前口三巻

下

ありやすうら。人も喜ぶ参りやす。そこで附木と
 配まきやす。硫黄りゅうわうと祝いわふといふらちりて祝いわひ賀がとる
 の心ざらふといふれ中なかが。至極しごくおもまらうら
 やス。江戸で脇わきり物ものと貫ぬきやすと移うつり附木つけぎと入いてや
 やすも矢張やっぢやう今の祝いわふといふ廻めぐり出でてでらや
 正ただ。五松ごしょうなるかと面白おもしろお説せつでややす。十長銀鶏ぎんけい先
 生の考かうへも面白おもしろややすが。附木つけぎの説せつへ今いま也や深ふかい
 廻めぐりと思おもえれやす。御大名形ごだいめいがたにて沖おき普ふ請じんが出でる

速すみお移徒うつりたのとき小こへ先ま一番いちばん小こ火ひと贈おくりり二番にばん小こ水みづ
 と贈おくりり。それらそれら散さんく小種こねくの品と贈おくりるといふこと
 であらやすう。附木つけぎと配くわるも今の火ひとわらうといふ
 廻めぐりやそのので有ありやすめら。五松笑わらひ面白おもしろいやうと
 微ちひと請うけにやうややす引越ひっこのとき近所きんじようら
 附木つけぎと祝いわつてよとすのたう面白おもしろややすが引越ひっこ
 方かたうら魚配いさなまき少すく火ひと贈おくりてやといふ訣わけ少すくいやす
 めら。十長相笑あひわらひなるやとさうであらやす。然さう

いふと銀鷄さんの説も向うを祝てよこすふい硫黄と
 いふことも面白うやすが是も引越と方うう近所へ
 祝めといふも可笑ぢやアつりやせんり。[五松]ワリやア人能
 々や正。私も御近所へ引越すころう皆さるる祝
 なさうてころう御といふ。祝でやアさう。硫黄と
 いふてが聞えや正。[鶴人]附木の説が大論とあり
 中々なるやど引越の喜小近所う附木と祝て
 られるのどと穂でつりやすが。手前うう向へやうゆら

いふと硫黄といふ銀鷄さんの説も臍北落が仕やせん
 中々でやうやア子。[万松]ワリやア善言がやうやせんり。脇
 物と貫ころうの里小附木と入てやうやスも。何寄な物
 とくごころうまうして右うごふう御す。こハ麓末な
 品でやう外が流移小懸とおいふひやノ中すすといふ。
 [硫黄]へかやアさう。随分聞えやすせん。[鶴人]さ
 中々。それもやうやア。江戸で中々引越小蕎麦
 と配るのいふいふ訣でつりや正ぬ。[十長]アリや訣も

なく手て軽かろ小こいいくくらら初はつッッととででららやや正ただ。[万松] ささややららとと。二

八はとと二にッッ三さん十じゅう二に文ぶんでで間ま小こ合あらら。全ぜんくく其その訣けつででららややススののとと。

イいやや甚し向むか麦むぎとといいへへ此こ地ちのの扱あをを屋や小こ。坊ぼくとと巻まむむいいとといいふ

省えん板ばんがが何なにりりややすすがが。アアリリヤヤ何なにでであありりややすすぬぬ。[鶴人] 玉たま子こ

蒸むのの志しつつややこのこのととででららややすすののろろくくなな名なとと書かききややススがが

皆みななな似にとと中ちゆうららななももののででららややスス。[千長] 此こ間ま何なに方かたででらら

見みりりけけ中ちゆうららけけがが。モもシし家いへのの前まへでで踏ふ白しろとと踏ふでで居ゐ中ちゆう

ととがが。ナなセせ外そとでであありりややスス子こ。[鶴人] へへ引ひりりややアア大おほ坂さかのの搦つか屋やでで

ららややスス。大おほ坂さかででいいあありりややすすとと持もてて歩ありりてて家いへのの前まへをを搦つか

屋やがが搦つかややすす。江え戸このの中ちゆうらら。并な搦つかのの搦つか屋やへへ大おほ坂さかにに有ありりややススんん

[万松] 踏ふ白しろとと持もつつてて何なにりりややすすののふふへへ大おほどどととででららややスス子こ。[鶴人]

ささややららとと。たたらられれらら江え戸このの白しろととここららががすすららいいへへ。たたららやや

いいららもも知しややせせんん一いち寸すん一いちここととででららややすすがが。浣せんとと制せい衣い

ののがが大おほ坂さかででいい立たてて居ゐててかかきき廻まりりややすすがが江え戸こででいい坐まりり居ゐ

てて仕しややすすででいい。[千長] へへ大おほ坂さかででいい立たてて居ゐててかかききややすすららぬぬ。

訣けつももたたららいいてていいららややすすがが。かかいい店みせのの札しるしとと張はりり曲まがりり

大坂で張ちぢって置おきやすぐ江戸で直ちぢ張ちぢやすせん。

車留くるまどめの札しやくちぢも大おほ小こちぢちぢやすよ。五松ごしょう 大坂おほしで

モシもしライらいおおんんづづととおおななどどいいふふ言ことばいい盛さかどどといいふふととどど

何なんりりやすやすぬ。鶴人つるひと ささややででややス。千長アアセイセイラク

いいまま正せいといいひひやすやすぬぬどどふふてて何なんりりやすやす子こ。鶴人つるひと

アアハハ穿せん敷しきといいふふとと何なんりりやすやす。今いま手紙てがみ小情せうじやう落おと

書かやすやすぬ。ソソレレチチヤヤアア分ぶんりりやすやすせん。五松ななららかかどど穿せん敷しき

てて何なんりり正せい何なんりり物ものととささががてて貫ぬきぬぬとと頼たのやすやすとときき

小こ井いイイララ致ちぢししまま正せいといいひひやすやすらら。穿せん敷しきででややららのの

やや正せい。千長せんちやう江戸えどで何なん致ちぢししままてていいふふ場ばとと大坂おほしででらら

ススツツウウナナといいひひやすやすぬ。昔むかし江え戸どででててんんづづけけどどのの

つつううけけどどののいいふふ知ちとと大坂おほしででいいふふとといいひひやすやすよ。五松ごしょう

ささややららとといいひひやすやす。鶴人つるひと 脇わきへへ他ほか行いくくとといいふふ

何なん方はうへへおおでで備びへへてて何なんりり井いといいひひやすやすままいいごごけけ餘あま計けい

ななややららででややららやすやすがが。ササヒヒススセセウウのの五音ごおんででままいいへへますますとと

いいふふとといいひひ何なん方はうへへおお出でたたららいいははすすとと聞きくくとといいふふややすす。

千長ちんちやういづくぬ面白言おもしろいことばでたりやス。鶴人つるじん江戸えどで一処ひとところの
 行ふゆといひやスと。大坂おおさかでへ連つらつて行ふゆといひやス。
 又また危あやう様さまといふ処ところとさよりと詰つめつといひやス。うう
 ちやつておけといふと。ホツテオケといひやス。江戸えどの
 ううちやつておけへお捨すてる置おけ大坂おおさかのホツテ
 オアお放はな下くだ為なて置おけといふのでたりやス。五松ごしょう大坂おおさか
 の昔むかしの言ことばの終まはへさういといふとといひやスが。とふ
 つふ訣くせでたりや正ただ。鶴人つるじんさやうとさやうとさうい

ふといふといひやすがアリやアぶふいふとてたり
 や正ただ。千長ちんちやうイヤ附つんとてたりやスが世間よこしま天満てんまんの天神てんじんへ往あ
 やい境けい内ないで子供こどもが獨ひと樂まと廻まわして居ゐると
 見み中ちゆうとつ。貝かいのこほでたりやスが。アリやぶふいふ廻まわ
 こととつのでたりやス。おして側そば小商人せうしやうじんがこほと
 賣うつて居あ中ちゆうとつ。誠まこと小綺麗せうけい麗れい小饒せうにやうつて置お直さやス
 五松ごしょうさやうとつ。おしておつなとと志こころやすすや。お相あいに
 の中ちゆうへ元もと筵ざと敷いて。中ちゆうと穴くちやめ注め其中ちゆうちゆうへとほと廻まわ

ヤスガどぶすりのでけりヤス子。鶴人アリヤあれで勝負まきうぶ
 ととのでけりヤス。ア、窪くぼど中へはと廻まわーヤスと。又
 跡あと々一人其中へ廻まわーヤス。其こでふらみのこはが
 皆みなな窪くぼど処あち小居ヤス。是こゝ兆ひこはとこはとが
 當あり合ヤス。其時射出しやうしされこはがまけふたりや
 して向むかへ其こはと取とるのけりヤス。ア、貝かいの唄うたと
 貝かいでけりヤス。江戸で番ばん太郎とらうで賣うヤス子供こどもの
 廻まわすべしとゴマといふやつ。此地こゝの唄うたこはうと出でとち

でけりヤ正唄せいうたとベイと江戸なけりけりけりヤス。
 其そのれどけり形かたちと御ご覧らんトヤ。唄うたこはの通りと木で
 拵ぐしらへこのけりヤス。千長せんちやうたるわどさうでけりヤ正唄せいこは
 へ糸いとで廻まわすやうすでけりヤス。江戸のベイとこは
 棒ぼうの先さきへ革かわとつけさう。切きとつけさう。このこは
 とあいて廻まわーヤス。鶴人つるじんとやうく横よこの方かた
 けりあきさやす。万松女房にようぼうの仕事しじとてをて面白おもしろ
 鉢はち箱ばこでけりヤス子。大坂おおさかのいこんをかうでけりヤス

うね。鶴人さやうさ。大抵此通りせりやスモ江戸
のとの大らぐひでりや正千長ヨリヤ面白製衣作ど
りやス。万松さん歸小土産小買ッて往や正せぬ。
好事家へらちつけでりやス。万松ようりや正。
多モ此間見かけ申。竹の筒へ錐穴をあける。
茶漉い穿でりやス。鶴人江戸へのお土産小
面白物もりやス。皆な運賃でかゝりませうけが
いりやす。万松それによるりやス。さうでりや

えんと瀬戸物類などおつる物も見かけ申。こが
さへおつるでりやス。鶴人書物へ物小依ッて江
戸より餘程恰好な物がりやス。こまへ買ッて
おつるなりや。千長さやうさといふとでりやス
。どろどろ種く調ふりやス。万松イヤ此間も
繪屋で見かけやすが。モ大坂の錦繪
も近年ハ強氣小能なりや申。江戸と
格別今での違ぬ繪が何程もりやス。鶴人

江戸の物類

三三

四

さやうと。浮世繪師小名大人が出来申さう。結
 構でウラス。千長大坂で何とウのが上手でウラス子
 鶴人似顔と能書ヤスの國貞のガ子の歌川貞并
 とウのがウラス。殊小成田屋の似顔へ分て平小
 入と物でウラス。又長崎の人でウラスが柳齋
 重春とウのがあざらしく大坂小居やすが誠
 とウか画ど何でも出来ヤス。笑天下なごへ心小
 せきり処とカサヤス。其外小も春梅齋北英

菊川竹溪。天満屋國廣。數おかいとてウラス
 今度銀鷄さんの街のウとこの口画と書申さ
 歌川貞廣とウいやすのが。ゆとせびりてウラスが
 強氣なものでウラスせん。実小後世恐るべし
 今小彫刺上ッウ御覧トヤ。五松たろやど
 負廣とウのウと聞や。慥布袋町小居人
 ウラス。鶴人さやうく能どせん。其んでウ
 やス。千長モ江戸の山下小居や。歌川國鶴も

大坂へ来て居たりやせんり。鶴人 ころろ小居り

ヤス。コレハ餘程腕がきつて居ヤス也。万松 さやうさ

江戸でも評判がよろうやせんり。千長 いや評判と

いへばやん小大坂の祭は大壮なものでいりやせんり。江

戸でも評判仕ヤス也。鶴人 至そ綺麗かそで

りりヤス。是はお目小かけふ。万松 今年いりやせ

んりぬ。鶴人 りりやすとも。大坂へ六月七月八月の

祭月でりりヤス。當月の早済やーが来月を

はさたりヤス。千長 此七月へ何方の祭であり甲とぬ。

鶴人 十五日が北野の天神の祭。廿四日が久太郎町

の猿田彦の祭。同日小地藏の祭もりりヤス。ハ

月へ又二日がさうみの天神の祭。九日がおやの天神

十五日が安土町の八幡。廿日が安井天神。廿二日

西の宮。廿三日が伊丹祭でりりヤス其外小も所々

小りりや正が先八月へこんかそのでりりヤス。万松 大

壮な祭の數でりりヤス。ソリやがん又来月を

樂たのしみでくりヤスりの。**千長**いづまぬおびも〜もて

くりヤス。**鶴人**イヤ祭まつりといへば此間友人の所ところり

南水漫遊なんすいまんぎゆといふ本と借かりや〜のろく面白

ことろくりヤス。其内小嶋こじまの内うちの移うつり物の番附ばんづけ

の字あざな〜がくりヤスガ。それ小つゝておはな〜が

ヤス。今出いまだ〜してお目小めこりけや正ただ。トいいながら本ほん箱はこより

爰こゝと讀よみて濟い覧らんトや〜。**千長**本ほんとよハヤあや写本あやほん

でくりヤス子。濱松主人はま松のしゅじんといひヤスいつ頃ころの人ひとと

りりヤス子。**鶴人**格別くわくべつ古ふるく無な人ひとでくりヤスり。作者しやうしやの駿しゅん

と分わりやせん。**万松**濱松主人はま松のしゅじんといふ大坂おほさかの戯場あそびまの

作者しやうしやで〜りやせん。**鶴人**さうりも知しやせん。此内こゝ小も

芝居しばいのとが大分おほりやせん。**万松**此こゝ離子りしよ遠物とんぶつといふ條じょう

でくりヤスり。**鶴人**さうりも其そ處ところと讀よみて濟い覧らんトや。

千長

万松

本ほん小こびりふ

○離子りしよ遠物とんぶつ 南水漫遊なんすいまんぎゆが三卷さんまゝ小出こるを
今いま爰こゝ小鈔せう録ろくす。

浪花ななはなの諸社しよしや水無月みづなづきの神かみ夏なつ小こ氏地うぢぢの色里いろぢより遠物とんぶつ

或ハ囃子と出して。祭禮の賑ひとする。小廊中を
宸よし。崎陽是小川ぎ。堀江坂所北の新地。廓中
崎陽の上小立人と難し。就中江南の地ハ歌舞妓
役者の住所也。妓婦。奇妓の化粧もかのづら。妙
手小至り。殊更遠物。囃子など。催す時ハ劇場
の輩。ちろりと添て日頃の艶色小百倍の美を
示す。衣將衣の物扱。奇ハ年々歳々趣向と新
小すとへとも。往古ハ々鹿なるもの。

未ノ事崎ノ内移りその番組

足曳子囃子

鳩さぶ山
音ばき山
かみ山
戸隠山
あつ山

宇治村百
あきあき
岩本やま
岩本やま
岩本やま

圖ナラズ
宝曆元未
の手の鳴の
内透め
番組あり
半切ひら
の文鹿紙
まの移り物

鎌倉山

より田やかろ

の内并十一

茶臼山

系井筒や小走

小出る。伯母

阿と山

さくや小系

捨山小天満

かろ里山

中舟や小隙

壺の梅と

出の山

枯枝や小滝

いつる妓婦。

石舟山

天満や梅

卅時の嶽

さな山

天満やもん

廿んと。價

龜田山

ぬや小基

五両ふく

三輪山

大黒丸岩

敬庵甲の

名山

系扇やとよ

櫛と米ぬ

熊の山

系扇やいと

繁の餅

甲山

大赤やと

と

中川山

慶園やと

出られば。

三か山

つと治むな

外の遠子

妻月山

おりのや長

お新い。

待り山

おりのや中人

花のか

待合町三巻

三巻

四

松山

大長

深

大内山

中

山本と

八

拍

お

第

大九

諸人

毛

大伊

目

す

大

一

は

山

文

ち

太鼓

さ

う

さ

梅

さ

の

系

於

さ

見

さ

咲

さ

と

系

世

の

三弦

竹由

三人

見送りおぼこころ

千穂の家楽

梅が端を
たる梅と
さしあ
と彼が名小
よせく梅

の花咲ことつひたせし宝曆末年

う小七十年とるはくも其頃の饒

世哥おも思ひやぐべし。衣將衣の物数寄と

ても大抵これ小准すと老波女の物語也。

近頃世歌小替うこ敷種か。是迄原書の儘く

千長 かるかどこれへ珍らふ書と拜見にや。

鶴人 面白お喩といひやすのへ其天満屋の梅が梅

のてでやえ僅五両で買つと梅が其時分ふと大

評判で流行哥小迄諷こといひやす。今時へ五兩

位の梅はおさんどもさしやせむ。宝曆元年の

天保五年迄僅八十四年小へら成やせん昔の

竹由

三

質素の処と内覧(おんらん)じや。**万松** たるを大者(おほし)ぬ所の尊(うん)
 ふうりやス。**千長** 扱(あつか)れどく、銀鶏(ぎんけい)さん(さん)が常(とこ)くひひやす
 ぶ。京傳(きやうでん)の骨董(こつどう)集(あつめ)や。馬琴(ばきん)の燕石(えんせき)雜誌(まじし)。種彦(しゅへん)
 の還魂(えんこん)紙料(しりょう)。北村(きたむら)の瓦礫(わらで)雜考(ざさく)。などといふも
 唯古物(ただこぶつ)と集(あつめ)ことむくり思(おも)つて見(み)て心(こころ)はらひど。比呂(ひら)な
 昔(むかし)の質素(しつそ)と知(し)せて。今日(けふ)の驕(おご)り省(しやう)の作者(さくしや)の
 腹(はら)どといふれや。ゴリゴリ右(みぎ)がてふ説(せつ)でひたりやせん。
鶴人 おかきふさうでたりやス。ワヤア感心(かんじん)ど。さういふ処(ところ)
 眼(め)とつけてみる。と滑稽(こつげき)言本(ごんぽん)と見てもあまなりやス

女房 さんや蚊(か)いぢが消(き)るさスんん。**鶴人** どうして
 蚊(か)が出(で)るさスんん。**万松** 江戸(えど)よりハ蚊(か)ハすくなひ
 ちうでたりやすぬ。**鶴人** 処(ところ)小(こ)よりて大(おほ)きふらひ
 やス。舟越(ふねこ)町(まち)たごの蚊(か)屋(や)ハ釣(つり)やせん。**千長** さうで
 たりやす。舟越(ふねこ)町(まち)といふ村(むら)田(た)嘉(か)言(ごん)先生(せんせい)の居(い)る
 処(ところ)でたりや正(ただ)し。江戸(えど)でも日本橋(にっぽんばし)の呉服(きふく)町(まち)辺(へ)ハおかしこ
 蚊(か)ハすくなふたりやス。**鶴人** さういふこつてたりやス。アリヤア

行状(ぎやうじやう)傳(でん) 二 卷(くわん)

御屋で紅と絞る其灰汁が土腐へ流るるら
蚊が涌ぬといふとてウリヤスガなるわとさううも知
れやせん。[五松]イヤ蚊の多いといひ申し。本所と
下谷でウリヤ正暮方山の口が聞やせん。ふんぐと
[長]谷中も大壯でウリヤスせん。
銀鷄先生の書齋用なごころとて。毎度疲中
とふ。[鶴人]さやうく。誠小蚊の多い処でウリヤス。
[五松]モン夜見世へ順慶町と心齋橋筋をウリヤ

ウリヤスカ子[鶴人]イへく所く小ウリヤス。先天満十
丁目助小。本町松屋町筋。日本橋筋。松屋町二
井戸まぐみけ。道頓堀其外小も毎月一度
立夜見世も又二三度宛ウリヤス。毎月
九日十日が天満の寺町小。玉十五日が。遠り
稲井何。廿四日が沖茶湯地蔵。廿五日が天満の天
神。一六の日が内平野町小立ヤス。ほごく。火
もウリヤス。イヤ又時の太鼓が廻リヤス。モウ四

ウリヤスカ子

見えやすお寢ひふりや正。コレカラハ蚊屋の

て寢ね漸なまといいくくや正。[万松] [千長] あへて まう 四ツ

々くやス。引切ひききたり。小お斬せや中ちゆうさ。女中おんなちゆうさ

秘ひじかかころらふ。鶴人つるひとととなくく舟ふねととここで居ゐやス。

[女房] オホおほくくさんさんやくやく。ナクなく起おこて蚊屋かむやを

釣つんんおお多たくく。

街能噂ちやうのうさ巻之三終 本

